

私にとって自然再生士とは

西武造園株式会社／自然再生士 河野 勝

湖岸緑地の管理運営に携わって

私は、昨年度まで琵琶湖沿いに位置する滋賀県営湖岸緑地（南湖東岸地区・湖東湖北地区）等の指定管理者として管理運営に携わっていました。琵琶湖は言わずと知れた日本最大の淡水湖で世界に20か所ほどしかない古代湖としても有名です。湖岸緑地は、琵琶湖の周囲に整備された都市公園で、湖と背後の山々によるダイナミックな景観が魅力です。駐車場やトイレ等が整備されているほか、BBQができるエリアもあり季節の良い時期には多くの方が訪れます。

琵琶湖はむかし、淡海と呼ばれ、湖岸の砂浜には白砂青松として多くのクロマツが植えられています。湖岸沿いは風が強いため、防風林として植えられたものかもしれません。滋賀県は、思いのほか雪が多く、日本の積雪量の記録（11.82m）をもつ伊吹山も滋賀県と岐阜県の県境にあります。一昨年には湖岸緑地でも大雪が降り、クロマツ等に多くの枝折れが発生しました。また、2017年台風21号では、強風により多くのクロマツが倒れました。クロマツは、代表的な深根性の植物ですが、倒れたクロマツをみると直根はなく皿鉢状の根系でした（写真）。推測ですが琵琶湖の周辺は地下水位が高いため、直根が伸びにくいのだと思われます。

白砂青松の景観や防風の観点からクロマツが選択されたものと思われますが、地域の環境条件（降雪や地下水位など）から考えると、ほかの樹種を選択する方法もあったと思います。



根返りしたクロマツ



国立公園にほど近い工場の緑化に携わって

もう10年ほど前になりますが、国立公園にほど近い場所で工場緑化の仕事に携わりました。この工場を緑化するにあたりコンセプトは、ほかの地域から「土壌や植物を持ち込まない」ことでした。そのため、工種としては敷地内の残存林からの移植と苗木植栽中心の工事になりました。植栽地の土壌には造成前にストックされた表土を用いました。移植については幹周や樹形に応じて工法を選択しました。大径木は、重機移植、数人で担げるような樹木は従来の移植、樹形の悪いものや傷のある樹木は根株で移植しました。苗木植栽は、林内から稚樹を移植、また、既存林で採取した種子から育てた実生苗を植栽したほか、地元で生産された（トレーサビリティのしっかりした）苗木を購入して植栽しました。グラウンドカバーには、地域景観としてススキが原を造成するため、ススキの大株を掘り取り、いくつかに分割して移植しました。また、この地域がかつて芝の生産地で敷地内にも芝生地が残っていたため、この芝のランナーを利用して播き芝で芝地を造成しました。

この工場緑化は鳥取大学日置教授にご指導いただいたものですが、教授の研究室ではその後の自然再生の状況についてモニタリング調査を行っており、10年を経過して順調に自然が再生されているとの研究発表を聞いて大変うれしく思っています。

自然再生士として

以前設計業務に携わっていた時に上司から「ランドスケープの仕事とは人と自然に折り合いをつけることだ」と教わりました。その場所にふさわしい自然を再生することによって、良い風景（景観）を作ることができます。自然再生士に必要とされる考え方・知識・技術は良い景観をつくるための道しるべになります。今後もこの道しるべを大切に業務に活かしていきたいと思えます。